



# Newsletter

映像メディア英語教育学会 九州支部

The Association for Teaching  
English through Multimedia (ATEM)  
Kyushu Chapter



第20号

2024年(令和6)年2月1日

映像メディア英語教育学会 九州支部事務局 発行

〒890-8565 鹿児島県 鹿児島市 高麗町6-9  
鹿児島女子短期大学 石田 もとな 研究室  
TEL. 099-254-9191(代)  
Email: atem9.office@gmail.com  
URL: http://atem.org/kyushu/  
編集: 福田 浩子

## Contents

巻頭言 Page1 支部大会報告 Page1-3 全国大会報告 Page 3-4 映像メディアショッキング vol15 Page 4-6  
2024年度支部運営委員 Page 6 出版物および入会案内 Page 7

## ATEM 九州支部 2024

ATEM九州支部会員の皆様

2023年の支部大会は、「新型コロナ時代」以降初めて対面での開催をすることができました。その記念すべき大会を勤務校である佐賀大学で開催でき、大変うれしく感じています。最後に対面での大会を実施したのが2019年大会(於:福岡大学)なので、なんと4年ぶりのことです。当日お集まりいただいたみなさんとお会いするのもその大会ぶりの方がほとんどでしたが、不思議とそこまでブランクを感じなかったのは、きっとオンラインで定期的に大会やその他交流を続けてきたからだと思います。

大会当日には5件のご発表をいただきました。詳しくは支部大会報告欄をご覧くださいと思いますが、松中先生の英語という言語への深い洞察、大学院でWorld Englishesについてご研究を進める中山さんによる「伝わる英語」に関する調査と考察、石田先生のご専門であるSDGsから論じられる国際的な社会問題についての議論、全国大会シンポジストである砂川先生による文学的手法を用いた映画の分析、同じくシンポジストの村田先生による、アメリカ文学とアダプテーションに関する考察。いずれもそれぞれのご発表者の高い専門性が感じられる、見ごたえたっぷりのご発表ばかりでした。おかげさまで大変充実した内容の大会となりました。

さて、前任の高瀬先生からバトンを受け取ってから、長らく支部長を務めさせていただきましたが、私の任期も今年度で満了となります。2024年度からは、鹿児島女子短期大学の石田もとな先生を支部長とし、新たな体制での支部活動が始まります。より一層のご支援をよろしくお願いします。 吉村 圭(支部長)

## 第25回 支部大会報告

- 日 時: 2023年8月26日(土) 13:00~17:00
- 会 場: 佐賀大学 本庄キャンパス 教養教育2号館 2103AL 教室にて



第25回大会はコロナ禍も落ち着いてきたため、4年ぶりの対面での開催のとなりました。外の強い夏の日差しとは対照的な、洗練された会は《対面での良さ》を改めて実感した大会だったと感じました。

今回の大会では、「言語学」「英語教育法」「LGBTQ問題」「文学」「異文化・宗教」など発表内容が多岐にわたっており、活発な質疑応答も行われ、ご参加いただきました皆様方には大変充実した時間を過ごしていただけたのではないかと思います。とてもオシャレな佐賀大学本庄キャンパスの涼しい教室の中で、直接会員の先生方とお会いして開催できた今回の大

また、開催校の佐賀大学の学生さんも参加してくださいました。「有意義で楽しい時間でした」「卒論へのモチベーションが上がりました」等のうれしいメッセージもいただき、とても有意義な大会であったと思います。

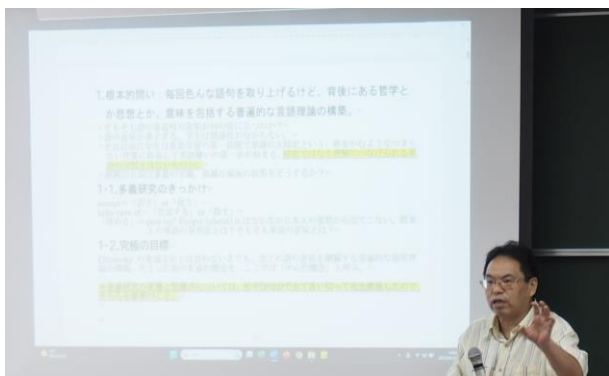
## < 発表プログラム >

### ◆ 研究発表

#### Session 1

映画の台詞から見る語の多義性と意味認識の原理  
— accept を基に —

松中 完二 (久留米工業大学)



①単語の多義性の理屈が教育現場において、何の役に立つのか?②辞書を引いても語の意味が多すぎて、学生は適切な意味とそれぞれ関連性が分からない。発表者は accept という語を基にして、この二つの問題の解決に当たる指針を報告した。

#### Session 2

日本人英語学習者にとっての「通じる英語」とは  
— リンガフランカコアに基づいて

中山 聡

(西南学院大学大学院文学研究科英語学専攻)

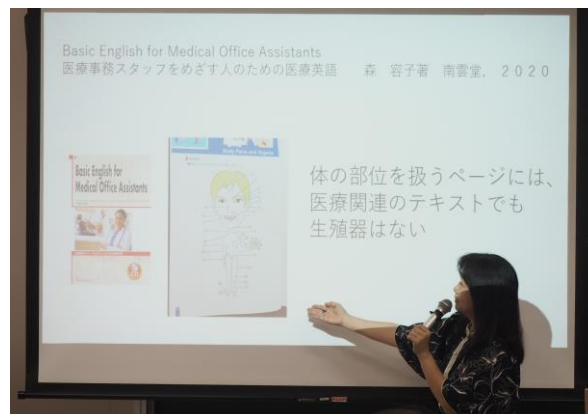


Jenkins が提示したリンガフランカコア (LFC) という世界規模の英語発音の指標に基づき、日本人英語学習者の英語発音の予備調査を行い、日本人の英語の発音について取り上げられている YouTube の内容を元に「通じる英語」について考察検討した。

#### Session 3

映画「Desert flower」から学ぶ世界の現実

石田 もとな (鹿児島女子短期大学)



ソマリア出身のモデル、ワリス・ディリーの自伝をベースに制作された 2009 年公開の映画「Desert flower」を題材として取り上げ、アフリカの女性たちが置かれている状況の厳しさへの理解と改善のためには、複雑に絡み合った宗教、文化、習慣などが根底にあり、世界の現状を多方面から学ぶ必要があると言及した。

#### Session 4

『ユージュアル・サスペクツ』を用いた文学の技巧  
の教授法—語りと視点—

砂川 典子 (北海道教育大学釧路校)



映画と文学の共通するテクニクとして—語り・視点・時間の操作・伏線—があるが、今回は真犯人探しがテーマの古典的なミステリー映画「ユージュアル・サスペクツ」(1995)を用いて、「語りと視点」に焦点をあて、その複雑な語りと支店の操作を分析し、いわゆる「文学離れ」の学生に小説の様々な技法を教授する可能性の考察を行った。

## Session 5

### 『緋文字』のリメイク版『小悪魔はなぜモテる?!』 の宗教・ジェンダー的視点

村田 希巳子 (北九州市立大学)



アメリカ植民地時代の抑圧的な宗教社会における姦通を描いたホーソーン代表作『緋文字』のアダプテーションである『小悪魔はなぜモテる?!』(2010)を取り上げ、映画に表象されているジェンダーや宗教問題、またLGBTQの差別問題について検証した。

#### 閉会式



#### Teatime



今回は会員の著書と、ご参加いただいた先生方からの銘菓を並べて展示(?)し、和やかな雰囲気の中での学会でした。

#### 親睦会

今回は久しぶりに支部大会終了後にささやかな親睦会を開催し、和やかな雰囲気の中で近況や発表へのコメントの交換、今後の抱負などを語りあう場となりました。

支部大会および懇親会にご参加いただきました皆様方には感謝を申し上げます。

## 第28回全国大会報告

[日時]: 2023年11月4日(土)~5日(日)

[会場]: オンライン(Online)

[大会テーマ]: 映像メディアで英語感覚と異文化理解を育む

九州支部からはSIGシンポジウム(文化・文学/映画分析研究会)にて、村田 希巳子(北九州市立大学)と砂川 典子(北海道教育大学)が「アメリカ文学の映画化におけるジェンダーをめぐる問題」の演題にて発表を行いました。

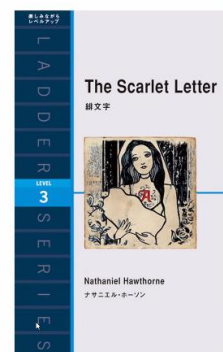
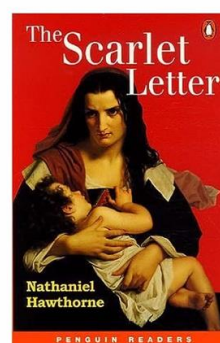
今回のシンポジウムでは、アメリカ文学の代表的作家であるナサニエル・ホーソーンとヘンリー・ジェイムズの長編小説の映画化を取り上げ、アメリカ文学の映画化におけるジェンダーをめぐる問題の考察が行われた。

村田は、アメリカ植民地時代の抑圧的な宗教社会に



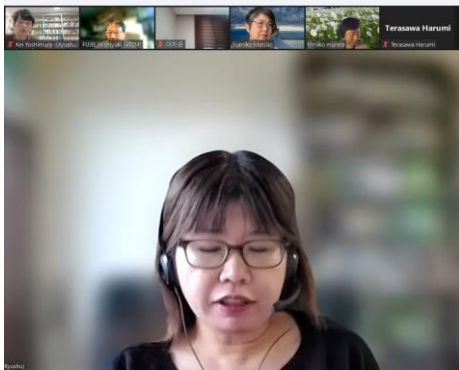
における姦通を描いたホーソーン代表作『緋文字』のアダプテーションである『小悪魔はなぜモテ

る?!』(2010)を取り上げ、原題 *Easy A* が示す通り、性的な噂を立てられた主人公の女子高生オリヴが「姦通“adultery”のイニシャルである“A”の赤い刺繍を服に縫い付けて学生生活を送るという、いわば『緋文字』のヒロインであるヘスター・プリンを現代に蘇らせたもので、原作のヘスター・プリンとその恋人の牧師を追い詰めるピューリタンは、映画では主



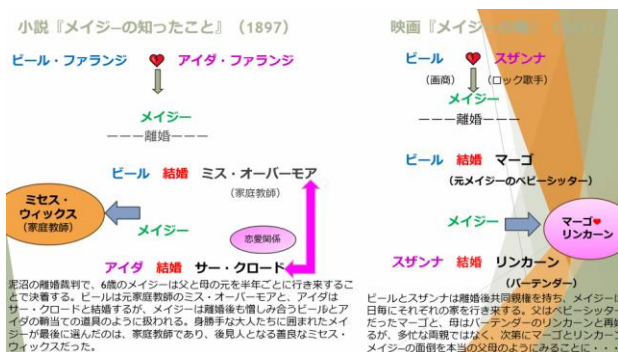
人公とその仲間を矯正しようとする学校や「敬虔な」大人たちに置き換えられている。発表では、原作『緋文字』にもふれながら、映画に表象されているジェンダーや宗教問題、また LGBT 差別問題についても検討をおこなった。

砂川は、ヘンリー・ジェイムズの長編『メイジーの



知ったこと』の映画化『メイジーの瞳』(2012)を取り上げる。『メイジーの知ったこと』は、19

世紀末の上流社会の離婚した夫婦とその夫婦に翻弄される一人娘を描いている。一方、『メイジーの瞳』は、舞台を19世紀末のヨーロッパから現代のニューヨークへと移し替えているが、メイジーの両親が離婚し共同親権を持つところは原作と共通している。両親はメイジーに愛着があるが、それぞれ多忙なうえに精神的に未熟で、メイジーと安定した親子関係が築くことができず、むしろ、メイジーの両親のそれぞれの新しいパートナー二人がメイジーと心を通わせ、疑似親子の関係を築いていく。発表では、映画版の結末を踏まえながら、現代アメリカにおける家族の問題やその新たな可能性を考察していく。



コロナ禍での Stay Home もようやく解消されましたね。このコロナ前後の数年間で世の中の仕組みが一気にすすみましたが、もちろん ATEM も以前の「映画英語」から「映像メディア」へと進化しています。

今回からは映画から映像メディアへと題材を広げて新たな分野へと進んでいきたいと思います。

### ～ 差別表現の改訂とアダプテーション： 『チャーリーとチョコレート工場』 ～

今年度から所属が変わった関係で担当科目が一新。なんと英語文学の授業を6つも担当できることになった。そんな恵まれた環境と山積する授業準備のヤバさに、うれし涙で前も見えなかった2023年2月ごろ、Roald Dahl の児童小説 *Charlie and the Chocolate Factory* (以下 *Charlie*) に関するニュース記事が飛び込んできた。作品の権利を所有する Puffin 社によって“fat”“tiny”など容姿に関する揶揄表現が書き直されるというもので、いくら差別的であっても作品そのものに手を加えることが許されるのか、大きな議論を呼んだ。このニュースが刺激となり、今年度の授業では *Charlie* や *Peter and Wendy* などの児童文学を差別表現に着目しながら読解している。

さて、*Charlie* の改訂でいうと実は今回が初めてではない。1973年に著者 Dahl 自身によって大きな書き直しが行われているのだ。その際改訂の中心となったが Oompa-Loompas の描かれ方だ。現在一般的に入手可能なのは1973年以降の改訂版だが、その中で Oompa-Loompas は架空の国“Loompaland”から連れてこられた「小さな人たち」(原文“tiny men”、ちなみに2023年改訂版では“small people”とされるのか)とされている。肌は“Rosy-white”、髪の色は“golden-brown”であり、白人を思わせる容姿だといえる。しかし衝撃的なのは初版(米:1964&英:1967)での設定だ。というのも彼らは初版では「アフリカから直輸入」(Imported directly from Africa)された肌が「ほとんど真っ黒」(almost pure black)な「小人族」(Pygmies)とされているのだ。さらに、以下は現行版にも残る描写だが、彼らは Willy Wonka によって「運搬ケース」(packing case)に詰められて「輸入・

密輸」(imported/smuggled)され、英語を話すようにしつけられ、工場でカカオ豆という法外に安い対価で危険な仕事に従事させられているのだ。しばしば奴隷貿易と関連付けて論じられるゆえんだが、「アフリカ」「黒い肌」の文言が消された現在の版でさえぎよっとする描写だといえる。

*Charlie*にはこれまで2つの映画が作られてきた。最初に作られたのは *Willy Wonka & the Chocolate Factory*(1971)で、Dahl 自身が脚本に関わった。この映画は先述した 1973 年の原作の改訂を行うきっかけにもなった作品だが、この中で Oompa-Loompas はオレンジ色の肌、緑の髪、白い眉といった、宇宙人のような外見に書き換えられている。こうすることで Oompa-Loompas のフィクション性が強調されているわけだが、彼らをアフリカという実在の場所から連れてこられた黒人として描くことは、公民権運動と人種差別撤廃への機運高まる当時の社会において到底許されるものではなかったものと思われる。一方で Johnny Depp 主演で有名な *Charlie and the Chocolate Factory* (2005) は、全 165 人の Oompa-Loompas を Deep Roy がひとりで演じたことでも話題となった。Roy というマルチカルチュラルな俳優が演じたことも意味深だが、何よりこの作品では、ラストで Oompa-Loompas に重要な「声」を与える仕掛けがされている。その観点で 2005 年版を見ると、最後にひっくり返るほどのどんでん返しがあるので必見だ。

2023 年末に公開予定の *Wonka*(2023)では、Wonka 氏と Oompa-Loompas の出会いがフィーチャーされるとのこと。果たして彼らについてまわる差別表象がいかにか現代という時代にアダプトされるのか、今から公開が楽しみだ。

(吉村 圭)



### ～ It's ability, not disability, that counts ～

来年はパリ五輪の年である。パリでは 3 回目、100 年ぶりに開催されるオリンピックだが、今回は過去 2 回の大会になかったパラリンピックがある。パラリンピックの「パラ」とは何だろうと考えた人はいないだろうか。ローマ大会(1960)と同年に開催された第 9 回国際ストック・マンデビル競技大会が第 1 回パラリンピックと認定されているが、実はパラリンピックと呼称され始めたのは東京大会(1964)からである。接頭語パラ(para)は、(a) 準・副次的 (b) 超えた (c) 反する (d) 対 (e) 近く、など様々な意味を持つ。パラがなにを意味しているのかに触れながら、この大会の基礎を築いたルードヴィッヒ・グットマン卿(Sir Ludwig Guttman)の実話に基づく映画を彼の業績と共に紹介したい。

グットマンはナチスのユダヤ人排斥運動を逃れて英国へ亡命した神経学者であった。1944 年、ストック・マンデビル病院の脊髄損傷センター長に就いた彼は、下半身麻痺ゆえに動くこともままならず目標も夢も自由もなく、文字通り棺桶に片足を突っ込んだ(=have one foot in the grave) 状態で入院生活を送る患者を回復させることに取り組んだ。スポーツが有効であると考えた彼は、スポーツを中心とした治療とリハビリに取り組み、それを競技にまで昇華させた。1948 年、ロンドン大会と同日に開かれた車椅子の選手による第 1 回ストック・マンデビル競技会は、回を重ねるごとに参加者が増え、国際化され、アーチェリー以外の競技も増えていった。東京大会では車椅子の選手を選定していたことから paraplegia(両下肢麻痺)と Olympic を合わせた語「パラリンピク」を大会愛称とした。ここでの para は上述の(d)の意味合いを持ち、下肢の「対=両側」に麻痺のある人を指していた。

ソウル大会(1988)から正式な大会名となったが、この当時にはパラリンピック参加選手の障害は両下肢麻痺の選手に限らず、視覚障害者や知的障害者も参加する大会となっていた<sup>2)</sup>。これにより、para の意味合いが変わった。オリンピックと並行して行われることから、パラリンピックは、「並行して」を意味する para を冠することとなったのである。

映画の演出は派手さもなく、最新の技術が盛り込まれているわけでもないが、下肢麻痺の傷病兵達が生きる意味を再発見していく様子はグットマン役の Eddie Marsan の好演とも相まって、しみじみと心に染みる秀作。世代を問わず見てほしい作品である。

## 2024 年度支部運営委員

- 1) 実際に兵士たちは棺桶に入れられて運び込まれていた。
- 2) 因みに、2020年の東京大会では162ヶ国の参加、アスリート4,403人、22競技、539種目である。  
(松尾 祐美子)

### ～ LGBTQを主題としたTVドラマ： POSE～

近年、世界的に取り上げられる問題の一つとしてLGBTQがあげられ、日本でも少しずつ認知されるようになってきましたが、十分な理解を得るにはまだまだ時間がかかる問題のようです。

2018年にアメリカで放送開始され、日本では2019年の5月からFOXにて放送された“POSE”は、New York Cityのボールカルチャーを通して1980年代から1990年代にかけてのLGBTQの若者たちを描き出し、トランスジェンダーの役柄はトランスジェンダーの俳優が演じるというコンセプトのもとで作成されたため、リアリティに満ちた魅力的な作品となっています。見所は週末にボールルームでのダンスやパフォーマンスを競う「ボールコンテスト」。派手なファッションとマドンナの「Vogue」の振り付けをまねてダンスを披露する「ボーギング」や当時のディスコダンスなどで、スーパーモデルが活躍した1990年代の華やかな雰囲気を盛り上げている反面、AIDSの治療薬がようやく開発され普及してきたにも関わらず命を落とすことになってしまう人々の苦悩がその時代背景とともにリアルに描かれ、この時代に彼らと同じく青春時代を過ごした私には懐かしさと同時に当時の彼らの困難な状況を実感させられたのも事実でした。

主演の一人、プレイ・テルを演じたビリー・ポーターがエミー賞主演男優賞を受賞、その後ブランカ・エバンジェリスタを演じたMJ・ロドリゲスがトランスジェンダーの女性として初めてゴールデングローブ賞の女優賞を受賞し賞賛されました。特筆すべきはプレイ・テルの受賞式で着用したタキシードドレスが、まさにLGBTQを象徴するものだといえるでしょう。

(福田 浩子)

この度、ATEM九州の支部長を拝命いたしました鹿児島女子短期大学教養学科の、石田もとなと申します。一般企業での勤務経験が長く、研究者としては新参者の私などに支部長を務まるのかと悩みましたが、頼りになる他の先生方のお力添えを頂き、チャレンジしてみようと思っております。至らぬところばかりかと思いますが、どうぞご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

今後の九州支部は、多様性を大切に、参加しやすく、楽しく、学びの多い学会を目指して参りたいと考えております。学会という難しい顔をして難しいことを議論する場を想像される方が多いようですが、そのような敷居の高い場ではなく、様々な立場の方が研究成果を発表できる場として認知していただけるような学会運営を心掛けて参ります。前支部長が作ってくださった和やかな雰囲気を大切に他の支部との交流も深めていきたいと思っております。九州支部を今後ともよろしくお願い申し上げます。

支部長 石田 もとな (本部 NL編集委員)  
鹿児島女子短期大学

副支部長 秋好 礼子 (本部 NL編集委員長)  
福岡大学

事務局長 吉村 圭 (本部 大会実行委員)  
佐賀大学

広報 (ホームページ・SNS・ニューズレター編集長  
吉村 圭 佐賀大学  
プロシーディング編集長

Nikandrov Nikolai 佐賀大学  
運営委員 (50音順)

大木 正明 大分県立芸術文化短期大学

篠原 一英 福岡県立筑紫高等学校

進藤 三雄 熊本県立大学

砂川 典子 北海道教育大学釧路校

Nikandrov Nikolai 佐賀大学

福田 浩子 福岡大学

松尾 祐美子 (本部 国際交流委員)

宮崎公立大学

村田 希巳子 (本部 ジャーナル編集委員)

北九州市立大学

会計監査 宮内 妃奈 福岡女学院大学

(2024年4月～2025年3月)

## 出版物のご案内

ATEM 九州の会員の皆様方の出版物のご案内です。

### ■ 研究書籍

#### 1. コロナとアカデミア

[編 著] 茂木謙之介、大嶋えり子、小泉勇人

[著 者] 松中完二、他

[出版社] 雷音学術出版 [出版年] 2022/5



[内 容] 本書は 2020 年度以降の高等教育機関で展開されたオンライン(ハイブリッド)授業およびオンライン学術イベントをテーマに、全国有志の教員から募った実践報告、および論考を所収した共著書籍である。

#### 2. 認知言語学論考 No.16

[編 者] 山梨正明 [著 者] 松中完二、他

[出版社] ひつじ書房 [出版年] 2022/8

[内 容] 認知言語学の最先端の論文を継続的に掲載するシリーズ第 16 巻。国内外の第一線の研究者の論文を掲載し、多岐にわたる認知言語学や関連する言語学の最新研究成果が交流する。



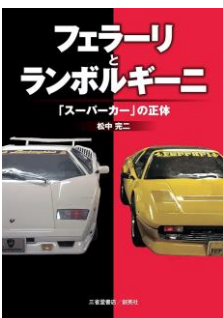
### ■ 一般書籍

#### 1. 『フェラーリとランボルギーニ 「スーパーカー」の正体』第 2 版

[著 者] 松中完二

[出版社] 三省堂書店/創英社 [出版年] 2023/8

[内 容] 「スーパーカー」のツートップであるフェラーリとランボルギーニに焦点をあて、科学的見地から「スーパーカー」の歴史、語源、系譜、特性を解明した本。オーナーという経験に裏打ちされたデータを基に、これまでの定説を覆す新たな証言と発見に満ちて



おり、趣味にも研究にも適した内容となっています。昨年 11 月に刊行された初版が 2 ヶ月で完売し、再刊行を要望するやまない声に応じて、約 500 ヶ所の訂正と最新情報および写真を追加したりリニューアル版となります。

## 入会案内

ATEM 九州支部では新規会員を随時募集しています。会員登録はホームページから受け付けています。ご不明な点は支部事務局 (E-mail) までお気軽にお問い合わせください。

Website : <http://atem.org/kyushu/>

E-mail : [atem9.office@gmail.com](mailto:atem9.office@gmail.com)

Twitter : <https://twitter.com/9atem>



### 編集後記

九州支部の News letter は今回で第 20 号を数えました。会員の皆様に九州支部の多様性、学術的な面と楽しさをこの News letter でお送りできていれば幸いです。

今年は九州支部大会も久しぶりの対面での九州支部大会でした。学会は「映像メディア・・・」ですが、やはり映像より実物に会った方が楽しいかも。

(H.F.)